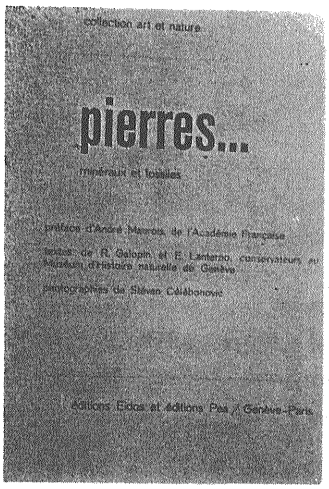


写真 1

地学漫筆 No.6
石の芸術

くらた・のぶお

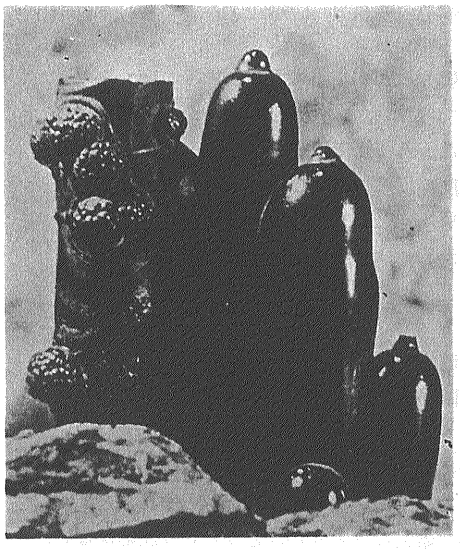
5年前アメリカに短かい旅行をして帰ってから　一番痛切に感じたことは　日本との違いは言葉でも習慣でもなく　気候風土だということであった．　サンフランシスコ第1日目には往復8車道のハイウエイに　これは道路が違うと思い　ロスでは80マイルの速さの自動車で1時間かかってぬけきらぬメトロポリタンディストリクツに領土の広さこそ違うと思い　6週間目に総じてお金持ちの加減で違うのかと思ってみたのであるが　帰ってからいくとおりかの "研究" をとじてよくよく考えてみると　一番最初から　つまり出発前から思っていた "気候風土" の違いこそアメリカと日本との相異を根本的に左右している因子だということに思い至ったというわけである．　たまたまある芸能記者がニューヨーク情報としてもたらした記事をよんでいたら　きたないはなしで恐縮だがと前おきして　はなくそが日本では黒いのがふつうだが　アメリカ大陸西海岸ではすでに白くなっている．　そしてニューヨークでは少し黒味をもって差し当り灰白色だが　やはりこうしたはなくその色の違いのよってもつてくるもとは　気候風土の違い　つまり日本ではこれほどしめっているのに対して　アメリカでは実によく乾燥しているという一点にこそあるのだということが強調してあったのに目がとまり　全く同感に思った．

写真2　ジュラ紀の Gryphea arcuata
（原写真は左右幅15 cm）

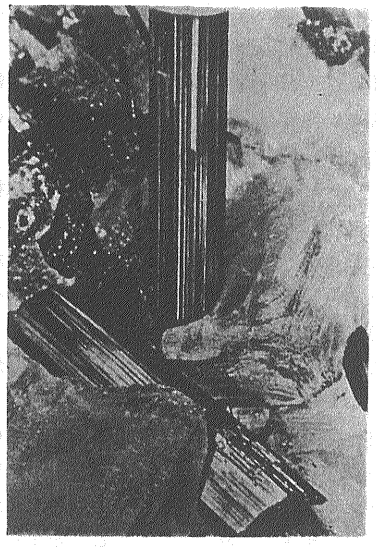
北京で足かけ6年間過した私には　こんなことは百も承知のことではあったが　そこはそこアプレの風潮にのって　ついつい道路の立派さ　わが国の30倍近くもある領土の広さ　十数倍の価値に相当する政府機関職員の待遇にひととき目がくらんだのであろう．　ともあれよくよく考えてみると　とどのつまりは　プレシニアンを核とする乾燥大陸とせいぜいデボンのちっぽけな　"岩石ろ頭"　の上に　モンスーンという巨大な水のかたまりがぶつかる湿潤島しょとでは　所せんくらべようもないという現実に思い至ったのである．

このごろでこそ　噴水がわが国でも都会のあちこちに姿をみせる余ゆうをもってきたが　街路は決して美しいなどといえないところが大部分である．　彫刻や銅像　モダーンなビルの窓枠や台石があっても　そばによってよくみるとほこりとごみでざらざらで　みられたものでない．　日本人はそんなものだと思い過している．　しかしかつての北京天壇の大理石の彫像は　黄塵万丈のなかにあって黒く汚れているのをみたことがなかったし　アメリカ西岸ベンチュラやサンフランシスコでみて廻った建物に黒くよごれた形跡はみられなかった．　こうした汚れというもののつきにくい‥‥　つまり乾燥を示すアメリカや中共大陸のようなところでは　当然のことながら　写真をとっても　きわだって鮮鋭・明りょうに映る．　これにくらべると　午前中にいくらか湿度が低くて晴れていても　午後にはヘイズがかかったり　曇り日になるような日が　365日のうち半分はある‥‥　わが国のように海洋にかこまれた島国では‥‥　おいたちからして写真には必ずしも好適とはいえず　国際コンクールに国内の取材をしていっても　りんかくが明白な写真というわくでは勝ち目がうすいという結論が明らかである．

たしかにスエーデンやドイツの写真はいとも鮮やかでアメリカの写真はさらに一段と明るさを加えているという感じであるが　これに比較してわが日本の写真はというと　さくらがすみのムードと一種特別な技巧という点では必ずしも魅力的でなくはないのだろうが　鮮明さ



③



④

写真3　リモナイト
（原写真は中央の結晶の高さ15 cm）

写真4　エピドートとカルサイト
（原写真は中央緑れん石の結晶は長さ13 cm）

明るさ　つまり明暗の強さという点からいくと　概して分がわるいというのが常識であろう．

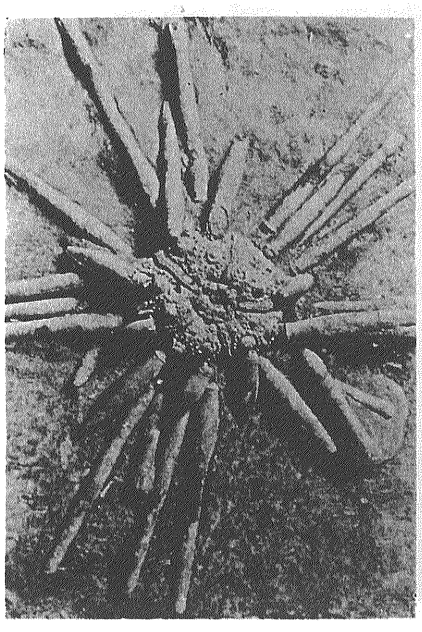
昭和10年前後　塚本閣治の山岳映画や　アーノルドファンのつくるところの“新しい土”（原節子主演映画）に魅せられたひとりであったが　中国大陸生活6年の間ライカでとりまくった3,000枚の経験からいうと　日本では“すっきりした”写真はとれないものだという　きわめて簡単な結論だった．

わが国では自然光線に依存する限りたしかに　大陸諸国にくらべて損な点が多い．　カメラを用意していってもヘイズがかかったり　曇ったりして思うようによい光線の取材ができなかったり　ひどいときには予定した日に雨が降るかどうかで　いつも“こうもりがさ”に気を使わなければならないという　まことに不利な条件下にある‥‥　ということは実は国内にいては意識しないのであるが　一度乾燥大陸にいくと　つくづくとそのあわれさを感じるのである．　あえてあわれさといってよいだろう　それだけ“こうもりがさ”をもちだしていて　結構乾燥大陸と同じように大都市では水不足のなやみをもっているというのだから‥‥．

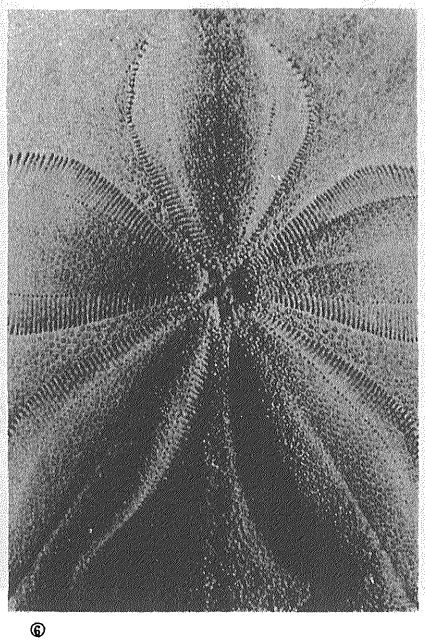
さて　ある日あるとき　ぶらりと神田を歩いていて“pierres”という表題の　なかみがなかなか美しい芸術写真にかざられた1冊の写真集を手に入れた．　pierresというのはフランス語でいう“石”であり　鉱物と化石

写真5　ジュラ紀の Pseudocidaris Durandi（原写真は2.2倍の大きさで上下の長さ28 cm

写真6　第三紀の Clypeaster algyptiacus（原写真上下で約24 cm



⑤



⑥

を通じて自然のおりなす美しさ　巧みさを写真という光学手段で芸術に結びつけた1冊の書物であった．　開いた頁はどれもこれも見事な鉱物あるいは化石の拡大写真であり　しかも文字どおり芸術的ふんいきのあふれたものばかりで　手に入れた帰りの日の湘南電車1時間たっぷりたのしめたというわけである．

この写真集 pierres は　22 cm×28 cm の大きさであるが　Stevan Céléhonovic という人の写した鉱物24種化石40種の芸術写真‥‥むろん十分な科学的価値があるが‥‥を中心にした　ジュネーブの国立自然博物館の R. Galopin 氏が鉱物　また同じく E. Lauterno 氏が化石を　それぞれ担当して科学的助言を書いている．　さらに序言は有名な小説家アカデミーフランセの Andre Maurois（アンドレモロア）氏がきわめて文学的表現で述べているが　そのなかで芸術と自然の関連にふれ　とくに鉱物の結晶や化石のうえに見い出される優雅さ　対称の美しさ　らせんのメカニズム　秩序の正しさなどは芸術作品をはるかに上廻るものであると最上級の賛辞を呈している．

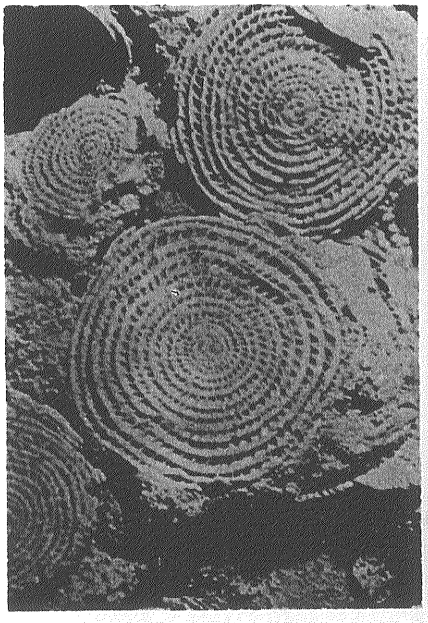
ともあれ　Stevan Célébonovic の写真は鉱物結晶の方で3～20倍　とくに7～8倍に拡大したものが多くまた化石の方は2倍から12倍ぐらい　有孔虫などは45倍という拡大振りで　一つ一つが目を見張るようなものであって　ふつうのひとよりこうした鉱物や化石をみなれている私どもでも　たしかにじーっと‥‥30秒ぐらいずつみつめていられるくらいである．　カラーならぬ白黒の写真ではあるが　そこがまた落着いたハーフトーンの味がにじみでていて　ピカピカに光ったカラー写真よりなまじっか好感がもてる．

もともと鉱物や岩石　化石の写真というのは　素人受けのするものではない．　貝の化石なんかだと高・中生あたりには　なーんだ海岸におちてる貝とよく似てら‥‥といった程度の反応があるが　鉱物や岩石となるとまず反応なしといってよい．　ただし宝石だというとにわかに眼の色がかわりはするが　そうした反応を求めるためなら　少々どぎつくてもカラー写真の方がずっと効果的だろう．

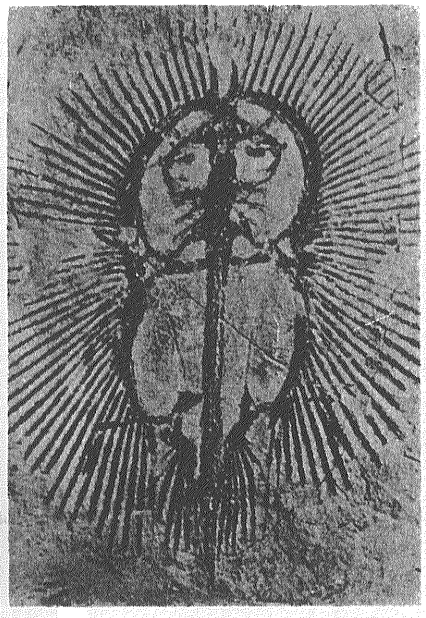
総じて野外現場でとる　いわゆる地学写真もこの例にもれない．　断層や岩石の接しょく関係などを苦心してうつしたものでもおよそ素人受けするにはほど遠い．たまにきれいに地形にでている断層崖や段丘あるいは尾根と谷とがおりなす秩序だった浸蝕地形の写真などにお目にかかるが　素人にはとりわけどうという反応はない．槍や穂高の山頂部がカレンダーの写真に用いられても宝剣岳の千畳敷カールや南の仙丈などがいっこうにぱっともてはやされないように　概して素人受けしないことはたしかなのである．

しかしそれでも程度問題であり　少し専門的に地学写真をとりまくるならそれはしばしば芸術的であり　立派に構図も光線も遠近明暗の調子もすぐれたものになることは必ずしも不可能でない．　なにしろふつう私たちのいう地学写真とは　野外の調査をしながら‥‥片手間にほんとうのつけたしでとるのだから　けっ作ができる可能性は大きかろうはずがないことが分っている．

とにかく写真には光線が一番大事であり　その光線が一番都合よいのは早朝と夕方とであるのだけれど　野外



⑦



⑧

写真7　第三紀の貨幣石 Nummulites laevigatus Lamarchi（原写真 中央の有孔虫の直径約 11 cm）

写真8　白亜紀の Cyclobatus oligodactylus（原写真 上下約 21 cm）

写真9　サンゴ状のアラゴナイト
（原写真　28×21.5cm）

写真10　自然金の結晶
（原写真　左側の短かい方で長さ16cm）

調査をしていては　その時間にうまく対象がうつせるというわけのものではない．　東向きの崖を夕方通ればいやでも日のかげろつたなかで　ろ頭をうつさなければならないし　北向きの山腹では‥‥わが国が北半球に存在する限り‥‥うまく陽が当ってハイライトがでるのをまっていても百年河清をまつにひとしいであろうし　まず素晴しい写真を期待できないのがふつうであろう．

大陸ではとにかく鮮明にものが映るし　北半球の原則は同じとしても　空気が澄んでいるという一事がやはりなにがしかの助けになって‥‥それにわが国内のようにことさら光をさえぎる草木が少なく　しかもわが国の岩石のように　写真うつりのわるい黒ずんだ色をしていないで　もっと原色に近い色をしていることが多いのでまっぴるま直上の光線でとつても　また少々陽かげで岩肌をとっても結構見栄えのする‥‥芸術的かどうかは別としても‥‥写真になるというわけである．

Geology は大陸でこそはじめて本式のものに接しえられるが　地学写真　気どっていえば　“石の芸術”もまたたしかに大陸ではとりやすい．　しかし鉱物の結晶にすればのびのびと発育し　化石にすればゆうゆうと石化の道をたどりうるような安全堅固な環境になかった　湿気の多い火山列島では　それをとびつくようなモチーフで　国際的な画材に仕あげるには　とかく労の多い割にうるところ少なしといった感が深い．

石の芸術に付づいさせてまことに恐縮だが　いまひとつ火山の噴火の写真についても考えさせられるものがある．　ヨーロッパやアメリカの雑誌にはよくショッキングな噴火の写真がでている．　たいてい近景には人‥‥　しばしばそれが夫婦づれの観光客であることさえ珍らしくないのだが‥‥　を配して火山弾や軽石のとびかう状況あるいは足もとに熔岩の流れている状況がクローズアップされているのにお目にかかる．　火山国の日本ではそうした噴火はふつう　新聞社のカメラマンによって接近写真がとられているが　ヨーロッパやアメリカのそれに比較すれば　犬の遠吠えみたいで　暗くてうっとうしいものがほとんどである．　みじんもユーモラスさをそこに見出いす余ゆうがない．

このあたり噴火ひとつとっても　噴火といえば人命の危険を感じてにげることをまっさきに考える島しょ民族のお国がらと噴火を“地球の芸術”としてみることができるように平素から教育されている大陸諸民族のお国がらとの相異が示されているように思われて仕方がない．

（筆者　地質部長）

なお本文に掲載の写真は　ここで紹介した“pierres”のなかにのっているものから数葉をえらびだして縮写したもので　最後の1葉は Geographic Magazine 1958年6月号のなかから借用・転載させていただいたものである．　小さくしたため原写真の折角の豪華さをそこなっている点をおわびするとともに　いずれも例示するために掲げさせていただいたものであることを重ねてお断り申しておく．

なお地学写真のなかに含まれるもので　顕微鏡写真がある．　この方面ではなかなか素晴しい魅力的な画材がたくさんにうつされていることを承知にしているが　ここではそうした顕微鏡的なものにはふれていないことを御承知おき願いたい．‥‥次回は“部長の週間日記”）

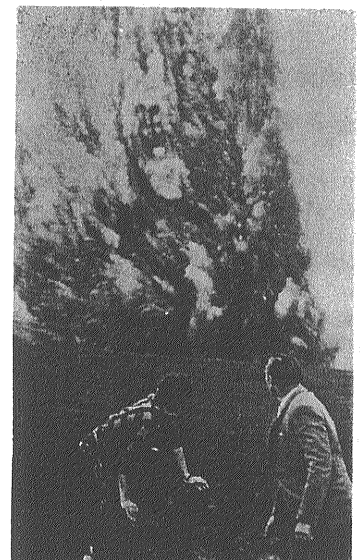


写真11　500キロ以上の岩塊をとばしている大西洋上の火山島の噴火と調査マン